

た著者の研究であるからであらう。

本書の優れたる特色とさる可き點を若干擧げたのみなる右の私の紹介は、唯單なる讀書感と謂ふ可きものかも知れない。然し乍ら、前二者が特に本書の生命とも謂ふ可きものであらう事は、私の確く信じて疑はざる處である。其が具體的に如何に理解々明せられてゐるか、一に讀者の精讀と批判に俟つ可きものであつて、凡そ希臘史に縁遠き私の到底云々出来る筈のものではない。従つて、美術史を歴史的に觀ると謂ふ時の歴史的と謂ふ事に、尙今少し突進んだ究明があるのではなからうか、とかクラッシックの概念規定の嚴酷なるに對し、ロマンティックなる用語は少しく常識的に陥りはすまいか等の疑問も、唯徒らに私の無智淺學を暴露するのみであらう。

美術史を志すもの、西洋史研究の學究は素より、教養を深く且高めんとする一般文化人の一讀を薦めて已まざる者である。(教養文庫 26 弘文堂發行 定價五拾錢)(西井克己)

CHRISTOPHER DAWSON: THE MAKING OF EUROPE. An Introduction to the History of European Unity, 400-1000 A. D. (London, 1933)

その新刊の故にはなく、その新視の故にこの書は紹介さるべきであらう。著者・ドウソンは既に文明・社會批評家として、又所謂 Medievalist として、その強きカトリック信仰を共通にする一

の思想家達、例へば T. S. Eliot, M. C. D'Arcy, J. Maritain, Z. Barylaev 等々と共に我國にも知られてゐる人である。これらの人々は「中世から近代への轉換をいはばノルマルからアブノルマルへの移行」(ペンテイ)として、又その宗教性 (religiosity) を喪失して世俗化 (secularisation) したところに近代の、そして現代の文明の最も大いなる缺陷があると考へる。近代ヒュマニズムは彼等によれば「中世フランス人間ではなく、むしろ中世マイナス神」(ジルソン)なのであつた、従つて何よりも先づ眞の宗教性、即カトリック信仰を恢復することこそ、現代の危機を克服し、解體しつゝあるヨオロッパを救済する道なのである。ドウソンは最近の著「宗教と近代國家」(Religion and the Modern State, 1935)の中でこのことを明確に述べてゐる。

然し我々がこゝで取上るドウソンは、文明批評家或は宗教的評論家としての彼ではなく、歴史家としてのドウソンである。勿論歴史家ドウソンと文明批評家ドウソンとは「デューキルとハイド」的存在ではない。歴史家としてのドウソンと文明批評家としてのドウソンは互に支へ合ひ絡み合ひ、而もカトリック信仰がその中樞的紐帶となつてゐる。しかしドウソンはカトリック的史觀を我々に強制するものではない。それなればならん新らしきものではなくアウグスティヌス以來の西歐の傳統的歴史觀である。我々がこゝで特に注目するのは、ヨオロッパ史に關するその European Unity の思想である。

勿論 European Unity の思想それ自體、何等新らしいもので

ないとも云ひ得よう。ヘレネスとバルバロスとの對立に歐の文化的統一意識の萌芽を指摘するの可能であらう。聖地奪還の十字

軍にその宗教的共同感情の自覺を認ぐことも許されるであらう。或は又白色人種對有色人種の人種闘争に、その人種的優越性を共に誇示することもよいであらう。然し我々は十字軍が歐の自覺的共同運動であつたと同時に反而歐の非ヨーロッパへの膨脹擴大運動であつたことを記憶せねばならぬ。近代はいはば歐が世界を相覆ふ時代である。歐は近代に於いて、他に對立する世界内存在ではなく、對立を内に含む世界そのものにまでなつた。對立するものは最早西方と東方、アジアとヨーロッパではなしに、所謂近代列強である。十九世紀のヨーロッパ史は若干の例外を除き、殆んどすべてかゝる國民國家的見地から書かれた、いはばヨーロッパを忘れたヨーロッパ史である。そこでは又歴々ヨーロッパ史と世界史と人類史とは三にして一であつた。ドゥスンはこの書の序文の中で次の様な意味のことを云つてゐる。即ち、過去二世紀間ヨーロッパ史は殆んど専ら國民的見地から書かれた。その結果はヨーロッパの發展の基底的統一性が、夫々異つた國民國家の傳統と、その政治的發展の歴史との一面的強調の故に失はれてしまつた。パリサイ的獨善と俗物的自己満足とは、ヨーロッパ解體の重要な要素である。従つて歴史に於けるヨーロッパの統一の見地、即ち European Unityこそヨーロッパ文明の窮極の基礎であるといふ歴史意識、をとり戻すことが何よりも必要であると。かゝる觀點から、彼がヨーロッパの形成期と考へる所謂暗黒時代を對

象として取上げたのである。

× × ×
この書は三部よりなつてゐる。第一部「基礎」(The Foundations)に於いて European Unity の三つの形成要素即ちローマ帝國(第一章)、カトリック教會(第二章)古典的傳統(第三章)について述べ、更にその構成的 Materials としてのゲルマンの文化(第四章)に言及した後、民族移動が決して破壊的でなかつたことを主張し(第五章)、かくて四世紀には統一體としての實體的基礎が、換言すれば上述四要素の融合によるその準備體制が形成されつゝ、あつたことを明にする。歐文化形成に關するかゝる見解は勿論なんら新しい又獨創的なものでなく、むしろ常識的ですらある。問題はその形成過程が如何に把握理解され叙述されてゐるかである。ドゥスンの特色はしかし、むしろ第二部、彼が「東方の擡頭」(The Ascendancy of the East)と題するものに認められる。

彼は從來の歴史研究に於いては東方は殆んど輕視されるか、無視されてゐたが、却つて西歐中世文化發展の上には重要な背景をなすものであるとして、先づキリスト教的ローマ帝國、即ち東ローマ帝國の性格とビザンツ文化のもつ古典的傳統を強調する(第六章)、次でビザンツ帝國内の政治宗教その他の領域に於けるオリエンタル的要素の擡頭、或は所謂東方的キリスト教の普及を指摘し(第七章)、更にイスラムの勃興に及ぶ(第八章)、ドゥスンはイスラム文化(九—十世紀)が決して單一なものではなく、むしろコスモ

ポリタンな性格をもつこと、特にそこに含まれてゐるギリシアの傳統に注意し之が中世西歐へ深い知的影響を興へたことを述べる(第九章)。(C)の點は尚彼の著 *The Medieval Religion* の中でも強調されてゐる。次いで彼は十一世紀頃のビザンツ帝國に於けるギリシア文化の復興を論じ、この頃に漸く顯著になつて來た東方と西方との對立をみ、東方の高度な文化は何ら創造的な力も良き後繼者も持たなかつた故に遂にその發展が切斷された(第十章)として第二部を終つてゐる。ドゥスンが得意とする文化交流 *inter-culture* の見解が最も鮮かに示され、東方の文化が巧みに織り込まれてゐるのは此の部分である。

かくてドゥスは第三部 (*The Formation of Western Christianity*) に於いて目を再び西方に轉ずる。即ち先づ西方教會、特に修道院の社會的文化的活動、別してアングロ・サクソン文化の影響を強調し(第十一章)、それが所謂カロリング帝國の文化的活動に於いて最も豊かに結實したことを述べ、特に修道院を中心とするカロリング文化こそ、一應従來の諸文化要素の *renaissance* とみなす(第十二章)。然し九—十世紀の帝國の内部的解體とヴァイキング(ノルマン)の外部的侵入により、西歐は再び混亂に陥り(第十三章)、遂にザクセン諸王、特にオット一世によつて再び統一され、オット三世に至りてたとひ實現は見なかつたが、新らしき歐統一の意識—即キリスト教的帝國のビザンツ的・カロリングの傳統、法王の教會的世界主義、修道院の改革の理想、カロリングのヒュマニズム、ロオマに對する國民的獻身等がすべ

て融合しつゝ、新らしく中世が生れつゝあつた(第十四章)と結んでゐる。

以上がこの書の骨子である。まさに皮をはぎ肉をそいだ骨子である。實際の書は、遙かに豊かな *erudition* によつて肉付され、新鮮なる而も獨創的な解釋によつて着付をされた、正確にして、一貫せる、極めて包括的な、暗示に富んだ概説書である、非才の故に此の書の甘き實を味ひ傳へることが出來ないのは洵に遺憾であるが、評者の目的は先述の如くこの著の書かれた意圖を特にその *European Unity* の思想を紹介するに止まる。その意味でもこの書は、ヨオロッパ史の研究、敘述に深い示唆を興へるものである。

× × ×

顧りみるに我國に於ける西洋史學は明治以來西歐の學界に相照應して發展し來たつた、若干の個別的の研究に於いては確かに優秀な勞作も少くない。然るに反面廣くヨオロッパ史乃至は世界史についての理解、把握に關しては、依然として、明治以來の、換言すれば輸入せられた十九世紀的學說の支配から未だ本質的には脱却し去つてゐない懸念なしとしない。世界史、人類史の構造、その敘述の可能性等の問題は暫く措くとして、少くともヨオロッパ史を所謂古代東方から、更には極端に人類の起源、宇宙の創成から敘述するが如き類の立場は、統一體としてのヨオロッパに對する反省の缺如を示す以外の何物でもない、それはまさに、ヨオロッパを忘れた西洋史であり、ヨオロッパ即世界とするヨオロッパ人

の優越感に無意識にしる追隨するものである。ヨオロッパが今や世界そのものではなくして、他と對立することに於いて存在する特殊の世界であることは嚴然たる事實である。たとひそれが今政治的に内部的對立抗争の状態にあるにしろ、それが依然として、その基底に一の歴史的傳統を共有してゐることは否定出来ない。むしろ歐各國の差異と類似、分裂と統一とは、却つてヨオロッパが一であることを自ら示すものである。ヨオロッパは今や轉生しつゝある、ヨオロッパがドウスン等が云ふ様に果してキリスト教によつてその解體が救済され再建されるか否かについては我々は直ちに賛成出来ない、が然し、ヨオロッパを一の統一體として把握せんとする態度にはたとひそれがカトリックの立場から出たにしろ反對すべき理由を持たない。而も我々が現實に直面せる東亞の事態は、益々この立場を採ることの必要を痛感せしめる、ヨオロッパを斯く把握し、それを歴史的に理解することが我々西洋史學徒の今日よりも先づなすべき課題でなからうか、しかも又そこにこそ眞に我國に於ける西洋史學(ヨオロッパ史學)の樹立の可能性と必要性とを主張しうる根據があるのではなからうか、又かゝる立場をとることによつて、我々は十九世紀以來の、特にランケ以來の史學の遺産を正しく受繼いで行くことが出来るのではなからうか、ドウスンの此の書物は少くともこれらの點に關し、廣く讀まれ、深く考へらるべきものを含んでゐる。(前川貞次郎)

McCarty, Harold Hull. *The Geographic*

basis of American economic life. N. Y. & London. Harper, 1940 p. 702 & 3-75.

東洋新秩序建設に關聯して、これを妨害する合衆國への我が國民の關心が深まり、これに伴つて我が國にても合衆國に關する著作が相次いで發表せられて來た事は誠に喜ぶべき現象である。然しながら、合衆國の大地に即した、基礎的な、ぢみな研究は比較的少ない様に思はれる。一見迂遠な基礎的研究が、合衆國を知り、複雑怪奇の様に見えるその行動と將來とを判斷する上に必要な何物かを提供するのではあるまいか。

本書がこの何物かを提供する最善の著作の一つであると云ふのととりあげたのではない。合衆國の地理を専門に研究する人々よりも、間接、直接合衆國と關係を有する人々、合衆國に對する對策を論じる一般の人々に、合衆國の産業状態に就いては、少くとも此の程度はと云ふ意味で一讀をすゝめ得る、合衆國の經濟地理書であると云ふ意味でとり上げたのである。

本書は元來は中學校用の合衆國經濟地理教科書として作られたものである。従つてその記する所も、著者の批判が加はり、著者の地理觀が明瞭に現はれて居ると云ふ様なものではなくして、最も問題の起らない合衆國の現實の姿の表現である。「地理と經濟」の「地理的環境」の二章を序として、直ちに地方論に入り、合衆國をそれぞれ特徴を有し、性質を異にする(一) Pacific Coast Region (二) Intermountain Plateau Region (三) Rocky Mountain Region (四) Great Plains (五) Northern Lake & Forest Region